



Title	第18回 チュラーロンコーン大学・大阪大学院生研究 交流会報告書
Author(s)	下本, 有美香
Citation	日本語講座年報. 2024, 2022-2023, p. 71-72
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95480
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【海外交流】

毎年、春と秋には、海外に留学したり、日本語の教師として活躍してきた仲間が、大学に戻ってきて賑やかになります。また最近は、日本語教師として海外に行くだけでなく、海外の学会で研究発表をする人たちも増えてきました。

第 18 回 チュラーロンコーン大学・大阪大学院生研究交流会報告書

下本 有美香

1. はじめに

本稿は、2023 年 9 月 7 日～9 日にかけて行われた、タイ・チュラーロンコーン大学との研究交流会についての報告である。今年度はチュラーロンコーン大学から 14 名（学生 7 名、教員 5 名、スタッフ 2 名）、大阪大学から 9 名（学生 6 名、教員 3 名）の計 23 名が参加し、有意義な学びの場を得た。

2. 研究交流会の概要

本交流会は、1 日目の共同研究発表会と 2 日目のワークショップの二部構成である。3 日目は観光のみであり、今年度はカオキアオオープンズーというチョンブリー県で人気な動物園を訪れ、交流を行った。2002 年の第 1 回開催から毎年、阪大の大学院生がタイに渡り交流を行ってきた。新型コロナウイルス感染症の影響により 2019 年度より中止されていたが、今年は 4 年ぶりに復活し、18 回目を数えた。両大学の親睦を深め、研究への気付きを得ることを目的に開催される。海外で研究に励む大学院生との交流は大変ありがたい機会である。

研究発表会は、チュラーロンコーン大学文学部マハーチャクリーシリントンビル（略称:MCS）にて開催された。2 日目は、バンコクから南に 100 km ほどのシラチャーに場所を移し、ワークショップを実施した。シラチャーは 1990 年以降、日本企業の進出に伴い、世界有数の日本人町として成長を続けるタイ中部の都市である。

表 1 全体スケジュール 1 日目

2023 年 9 月 7 日	
9:00-9:05	開会式
9:05-9:35	加藤先生によるご講演
9:35-10:45	発表 第Ⅰ部
10:45-10:55	休憩
10:55-12:05	発表 第Ⅱ部
12:05-13:00	昼休憩
13:00-14:10	発表 第Ⅲ部
14:10-14:20	休憩

14:20-15:30	発表 第Ⅳ部
15:30-15:40	閉会式
15:40-16:00	意見交換・記念撮影

表 2 全体スケジュール 2 日目

2023 年 9 月 8 日	
9:00	シラチャー到着
9:00-10:30	発表準備Ⅰ
10:30-10:45	休憩
10:45-12:00	発表準備Ⅱ
12:00-13:00	昼休憩
13:00-14:00	発表準備Ⅲ
14:00-14:15	休憩
14:15-16:00	発表
16:00-16:10	閉会式

3. 共同研究発表会

1 日目に行われた発表会では、大阪大学から 6 名、チュラーロンコーン大学から 2 名、計 8 名の大学院生が各々の研究について発表を行った。全体の発表内容としては、年少者日本語教育、ICT 教育、アカデミックライティング、会話分析、文化の 5 分野からの発表が行われた。発表者は各自の研究分野や研究手法、考察について紹介し、相互に話を聞いて良い刺激を受けた。質疑応答では、両校の先生方や学生から質問や意見が出され、自分にはなかった視点に気づく貴重な機会を得た。

また発表に先立ち、大阪大学日本語日本文化教育センター(CJLC)所属の加藤均先生による、日常生活における仏教についてのご講演が行われた。その後、長年両大学の友好関係に貢献なさった加藤先生のご退官を記念して、チュラーロンコーン大学から記念品が贈呈された。

4. ワークショップ

2 日目は、シラチャーに移動しワークショップを開催した。本番に至るまで事前に何度も話し合いを行い、全体のテーマや各班の小テーマを設定し、発表準備を行った。

今回は「メディア・コンテンツにおける日本とタイの『ジェンダー・ステレオタイプ』について考える」を大テーマに、4人ずつ4グループに分かれて各班で小テーマを決め、議論を行い、最終的に一つの発表にまとめた。日タイのジェンダーに関するコンテンツや資料を閲覧し、両国の文化や意識にも目を向けながらメンバーで議論を重ねたことで視野が広がったように感じる。各班オリジナルリティに富んだテーマを設定しており、ジェンダーについて多方面から考える契機となった。多様化する社会の中でジェンダーの在り方について意見交換できたことは意味深いと感じる。

5. さいごに

今回の交流会は、事前準備から当日の運営に至るまで、両大学の学生が中心となって行った。自分たち自身が企画した交流会が無事に終了したことに安堵すると同時に、誇りに思う。もちろん改

善すべき点も多いため、次年度以降よりよいものを目指していきたい。

新型コロナウイルス感染症の影響もあり、今日の私たちは単独で行動したり、人との関わりが少なくなっている。しかし、今回の交流会ではタイの大学院生とだけでなく、同じ阪大の大学院生とも交流を図ることができ、話すことで多くの刺激や学びを得た。これから様々な人と出会うことを大切にしていきたい。マニュアル等もないなか、4年ぶりに交流会を復活させるのはかなり大変だったが、今回の交流会はコロナ禍からの新たな出発点としての意味も持つと信じている。本交流会で考え、そして得たものを活かし、今後も勉学に励んでいく所存である。

最後になりましたが、両校の先生方、院生の皆さんが一同に集い、交流会を開催できたのも、ひとえに先生方や事務の皆さんのお力添え、そして忙しい中準備を進めてきた両校の学生の皆さんのお陰です。厚くお礼申し上げます。

**第18回チュラーロンコーン大学・大阪大学
大学院生研究交流会**
2023年9月7日(木) 9:00~16:00
チュラーロンコーン大学 MCS401/16

9:00~9:05 開会の挨拶 チョムナード・シティサン先生 チュラーロンコーン大学
9:05~9:35 ご講演 加藤 均先生 大阪大学「日常仏教語が崩れ出すもうひとつの日本」
(司会：永原 順子先生 大阪大学)
午前の部 司会：市来 海唯/チャヤーニット・ウィットクンサンワット

9:35~10:10 木戸 明日香「日本語支援者が行うスキャフォールディングは、何を基に組み立てられているか―実施者自身による会話分析―」大阪大学
10:10~10:45 栗田 仁以奈「CLD児を担当する教員の意識調査」大阪大学
休憩 10:45~10:55 (10分)

10:55~11:30 カウイン・センチャラーン「コロナ禍後の時代におけるタイの初級日本語学習者のICTの使用状況」チュラーロンコーン大学
11:30~12:05 田中 侖弥「学部卒業論文の先行研究の章における推敲過程―推敲過程と意識調査を通して―」大阪大学
昼休憩 12:05~13:00 (55分)

午後の部 司会：田中 侖弥/アンヤマニー・チュアンスワニツチ

13:00~13:35 児玉 七海「日本語とモンゴル語会話における対照会話分析」大阪大学
13:35~14:10 下本 有美香「ベトナム語を母語とする日本語学習者の日本語依頼発話の分析―がライイトネスの視点を添えて―」大阪大学
休憩 14:10~14:20 (10分)

14:20~14:55 市来 海唯「疫禍場面における依頼の断り―連鎖組織に注目して―」大阪大学
14:55~15:30 パッサポーン・ターラースック「日本の現代文学における『死神』の役割を通して見る日本人の死生観」チュラーロンコーン大学
15:30~15:35 総括 永原 順子先生 大阪大学
15:35~15:40 閉会の挨拶 簡井 佐代先生 大阪大学
15:40~16:00 意見交換・記念撮影等

主催：チュラーロンコーン大学文学部東洋言語学専攻日本語講座、大阪大学文学部東洋学専攻

写真1：発表会ポスター写真



写真2：集合写真